

「森

や植物を見るときは、長い歴史を背負っているんだ」という目で見てほしいです

ね」と、東京学芸大学の小泉武栄教授は語りはじめ、「森に親しむ機会や関心が高まっていますが、これまでの自然観察会といったものは『この木は〇〇です』、植物だと『これは水芭蕉です』といった説明だけで終わってしまうケースが多かった。貴重な植物を目にしたことで感動を受けるということはあると思う。でも、森に入ったら森全体を、そして山の自然全体を見て欲しいのです」と説明しています。

では、森全体や自然全体とは何のことだろうか？
小泉教授は「尾瀬に向かって鳩待峠から降りていくと全部がブナの木ですが、途中、ネズコがポツンポツンと出てきます。なぜ突然植生が変わるのか？ 疑問を持ってよく見ると、そんなところは必ず川沿いの岩場になっているんです。また、至仏山しぶつさんはかんらん岩や蛇紋岩のところが多く、重金属を含むため、普通だと木は生えないはずなんです。しかし、そんなところにネズコやキタゴヨウが森を作ったりしている。前の枯れた株があつてそこから次の世代が出る。またそれが枯れた後に次が出るというように重なっています。これを見るとみんなすごく感激します。このように周りの環境を良く見ることで、今までにない発見が次々と出てくるんです」と、森にアプローチするときのポイントを話します。

「シデコブシという綺麗な花があるんですが、この花は岐阜県南部と愛知県の瀬戸地方にだけ分布

緑のエッセー

東京学芸大学 教授 小泉武栄

小泉 武栄（こいずみ たけい）
1948年長野県生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程取得。理学博士。現在、東京学芸大学教授、専門は自然地理学、地生態学、山の自然学。著書に『自然を読み解く山歩き』（2007、JTBパブリッシング）、『山の自然学』（岩波新書）、『日本の山はなぜ美しい』（古今書院）など多数。



が限られています。ハナノキやナンジャモンジャ（ヒトツバタゴ）もこの地域に多く分布しています。なぜか？ 三〇〇万年前くらいから一〇〇万年前くらいにかけてこの地域は湖で、瀬戸物の原料となる粘土層が溜まりました。そこに一〇〇万年前くらい前に伊豆半島が本州に衝突し、四万十帯という地層に割り込むように押し上げ、南アルプスや木曾山脈を作った。ここで侵食された砂が粘土層の上に積もり砂礫層されきを作りました。雨は砂礫層を浸透し、粘土層で遮られるからこの地域は湧き水が豊富となります。そこでシデコブシやハナノキなどがこの地域に分布するわけです。地質・地形を見て植生を推し量る、植生を見て地質・地形を推し量る。相互に関係しているから面白いのです。森に入ると、森から自然を推し量る。森から太古の地殻変動や地層の成り立ちを考える。こんなことをすれば楽しくてしょうがなくなりますよ」と先生の話は終りません。

「地質学と植物学、その間をつなぐのが自然学で、私はこの狭間を研究する自然学者だと自負しています。皆が専門の分野を探索する中であつて、一人くらいは昔の博物学者であつてもいいのではないか」というのが先生の信条と聞き取れました。

森に入ると自然にまで関心を広げるのは難しいです。ねとの質問に、先生は「一見ハードルは高いように見えますが、最初だけです。関心が疑問を呼び、疑問が関心を呼んで、自然と熱中していきます。最初は何か一つに関心を持ってほしいですよ」というのが先生のアドバイスでした。